

# Go to Next Stage

地元の偉人名護親方の黄金言葉は、今でも県民の人生教訓となっています。沖縄人の誇りとアイデンティティを確立しよう。

## 名護親方の肝歌とは

### 名護親方(程順則)



名護親方、中国名で程順則は、1663年に生まれました。1728年から6年間名護間切の総地頭になり、名護親方と呼ばれ、政治家、学者、教育者としても知られています。

彼は、21歳から5回、中国にわたって学問を深め、「六諭衍義」を琉球に持ち帰り人々に広めました。1718年には琉球初の学校「明倫堂」を設立しました。

名護親方は、名護市の地域アイデンティティの象徴として、名護市民の道徳心を高め、健全な社会の形成に貢献しました。名護市では六諭の徳目に着目し、その教えは、いつの時代でも通用する「不易の価値」として、現在も着目され続いています。

### 名護親方の肝歌

名護親方が編んだ「琉球いろは歌」。この四十七首には、「肝」の漢字を使った歌が二十二首もあり、ほぼ半分に近い割合です。

ここでは、肝の漢字が入っている歌をいくつか抜き出して、沖縄のチムグクル(沖縄人の大切なこと)を紹介します。

歌意を理解して、これからの人生や生き

方の指標として、誠実に自分の心に染めていこう。

い いちんゆしぐとう み うい たから  
意見寄言や 身ぬ上ぬ宝  
耳ぬ根ゆ開てい 肝に止みり

人さまの意見や言葉は自分にとっての宝物。耳の根っこを開いて心に留めなさい。

ろ ろかじさだ はに  
艚舵定みていど 船ん走らしゆる  
寸分はじらすな 肝ぬ手綱

艚と舵がしっかりしてこそ船を走らせることができる。心の手綱も寸分も外さないようしっかり持つのですよ。

は はじ う あさゆうもぬぐと  
恥ゆ思みちみり 朝夕物事に  
我肝修みゆる 要とうむり

「恥」について深く考えなさい。自分の行いを反省して心に留めるのですよ。

ゑ えかじか ふでいさち かざ  
絵描ち字書ちや 筆先ぬ飾い  
肝ぬ上ぬ真玉 朝夕みがき

絵や字が上手に書けるとは言ってもそれは小手先だけの飾りのようなものです。本当に美しい人間の飾りは真心です。それを朝夕怠ることなく磨くのです。

## 琉球王国の位階制

琉球王国時代の位階制度は、第3代・尚真王の時代に確立されました。まず、金銀の簪(かんざし)によって身分の高い人と低い人を分けます。次に、六色の冠(ハチマチ)によって等級が制定されました。位階によって称号や身分・品位が変わります。

名護親方は、紫冠をかぶる上から2番目の高級官僚の位を持つ方でした。

- ・王 族…浮織冠(王子、按司)
- ・親 方…紫冠(高級官僚)
- ・親雲上…黄冠(中・高級官僚)
- ・里之子…赤冠(下級官僚)
- ・筑登之…赤冠(下級官僚)

親方(ウエーカタ)、親雲上(ペーテン)  
里之子(サトヌシ)、筑登之(チクドウ)

位を表現する冠色を紹介しましたが、この位階制度は身分制度を表しています。琉球王国も江戸時代の日本と同様に、実力があっても、百姓であると士族への昇格は皆無だったそうです。

今の日本社会は、一生懸命努力して頑張れば、だれでも平等にチャンスが得られる世の中です。自分の思いや努力次第で将来の明るい道が開ける今の時代をありがたく思います。



サイバー犯罪防止教室(7月7日)

## 悲劇の占い師 木田大時

琉球王国の尚真王時代のお話です。天文・暦・易学の第一人者、木田大時という人物がいました。国王からの信頼も厚く、王府に仕えていた彼は、並外れた神通力を持っていたがゆえに、生命を落とすことになってしまった悲劇の占い師でした。

王府に仕えていた大時ですが、大時を妬む者の吹聴と奸計により、国王の御前で大時は命を賭けてその神通力を試されることになりました。

木箱の中に1匹のネズミを入れておき、「箱の中にはネズミが何匹入っているか当ててみよ」と大時に数占いをさせたのです。「ネズミは5匹でございます」と大時は答えました。「本当に5匹か?」「はい」。しかし、箱のなかに入れたネズミは1匹です。大時を信頼していた国王は愕然としました。命懸けの数占いを外してしまった大時は、国王を惑わす悪人とレッテルをはられ、安謝の処刑場で処刑されることになりました。

ところが、ネズミの入っている木箱を片付けようとしたところ、なんと4匹の子どもが生まれ、ネズミは5匹になっていたのです。「大時は正しかったのだ」。国王は急いで処刑を中止させようとするのですが、時すでに遅し。並外れた神通力を持ち合わせていた木田大時は帰らぬ人となってしまったのでした。

過って木田大時を処刑してしまったことをたいそう悔いた尚真王は、歴代国王が眠る「玉陵」に、木田大時を大切に祀ったと伝えられています。

木田大時のご子孫のあいだでは、玉陵に木田大時が祀られている伝説が脈々と語り継がれ、先祖供養の行事である清明祭(シーミー)のときには、大時の子孫の方々が、今でも大勢で玉陵にお参りにいらっしやるそうです。

